

## 朽ちることない命のパン

### ヨハネによる福音書6:24～35 / 李正雨師

漫画をドラマにしたウェブドラマの中で、「孤独なグルメ」というドラマがあります。2012年からテレビ東京で放送しているドラマですが、このドラマの内容は、食べ物を食べることについてのことです。ドラマの主人公は、職業上、多くの地域に出張をします。そして仕事が終わった後、出張に行った地域の食堂で食事をしますが、この食事に関するいろいろなシーンを見せることが、このドラマの主な内容です。食堂と食堂の主人の姿、様々な料理と食堂の中の人々の姿、食事をする主人公の姿と食事に対する感想などが、このドラマの内容です。このように簡単な内容で構成されているドラマですが、今年、シーズン9まで出て来るほど、大きな人気を集めています。この単純なドラマが人々に好評を受けているということ。これが示しているのは何でしょうか。食べるということが、それほど私たちの生活の中で大事であるということではないでしょうか。

今日の福音書は、私たちの生活の中で大切に思っている食べるということを取り上げています。イエスさまはご自分に従って集まった多くの人々に、パン五つと魚2匹でふるまいます。集まった人々は5000人であり、彼らが満腹になって残ったパンくずは、12のかごのいっぱいになりました。イエスさまはこのしるしを通して、ご自分が誰なのかを示されましたが、人々は、イエスさまが誰なのかについては、大きな関心を持ちませんでした。イエスさまが行われた奇跡だけを見て、イエスさまを王にしようと思いました。ここで、イエスさまは彼らから離れられました。彼らの関心が、自分のためのことだけにあったからです。しかし、奇跡を味わった人々は、イエスさまが自分たちから離れることを願いませんでした。彼らはイエスさまの弟子たちが船に乗って出かけたことに気づき、イエスさまと弟子たちを探しにカファナウムに行きました。そしてカファナウムでイエスさまと出会いました。

イエスさまはご自分のところに来た人々にこう言われます。26節の言葉です。「イエスは答えて言われた。『はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。』」イエスさまは、人々が、なぜご自分を訪ねてきたかをご存知でした。彼らは満腹したので、イエスさまを捜したのです。満腹したからだという言葉は、一日の糧を求めることとは違うことだと思います。イエスさまの助けが必要なので、来たのではなく、自分の腹を満腹にするために、すなわち欲を満たすために、イエスさまを捜したのです。彼らには目的がありました。自分たちのために、自分たちの計画を実現させるために、イエスさまを王にすること。それが彼らの目的でした。

このような目的を持って、ご自分を捜してきた人々に、イエスさまは、朽ちる食べ物のために働いてはならないと言われます。彼らの目的は、この世にありました。大義名分としては、ローマからの独立と自分の国の繁栄だったでしょう。しかし、彼らの中には、自分たちの出世と成功に対する欲もあったと思います。彼らは自分たちの大義と個人的な欲、両方を成し遂げてくださるメシアを待っていました。そしてパン五つと魚2匹で5000人を食べさせたイエスさまを見ると、彼らは、イエスを自分たちの王にしようと思いました。イエスであれば、自分たちのためのメシアとして適切だと思ったからです。しかし、イエスさまは彼らの王になることをお断りになります。肉体的なことは、朽ちるしかないからです。それは正義を行うことができず、人の命を救うこともできず、永遠の命を与えることもできません。イエスさまは朽ちる肉体のために、この世に来られたのではありません。一つの国のために来られたのでもありません。みんなの救いのために、すべての人に永遠の命を与えるために、この世に来られました。だから、彼らの考え、彼らの願いは、神さまの御心と合わないことでした。それでイエスさまは、彼らに朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくなる永続的な命に至る食べ物のために働きなさいと言われます。そして、これこそ、人の子が人々に与える食べ物であると言われます。

ルカによる福音書12章22節で、イエスさまはこのように言われます。「イエスは弟子たちに言われた。『だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。』」この言葉の意味は、肉体を大切に思っはいけないということではありません。肉体のためだけに、肉体を満腹にす

るために生きてはいけないということです。イエスさまは、肉体の王になることを断られました。もし肉体の王になることをお望みになったら、力のないおとめから生まれなかったでしょう。ヘロデの宮殿、もしくは、ローマ皇帝の宮殿で生まれたでしょう。その方がイエスさまの道を伝えたり、イエスさまが人々の王になったりすることに、もっと容易だったでしょう。しかし、イエスさまはご自分を低くして、低い人として生まれました。イエスさまが低い人になられたというのは、人々の肉体のためにこの世に来られたということではないでしょう。自分に従う人を満腹させるために、朽ちる食べ物のために来られたのではありません。神の仕事を行うために、人々に神の業績である自分に続くために、この世に来られました。今日の福音書29節の言葉です。「イエスは答えて言われた。『神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。』」

このようなイエスさまの言葉に、人々はしるしを求めます。自分たちが信じることができるしるしを行ってくださいということです。30節の言葉です。「そこで、彼らは言った。『それでは、わたしたちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。』」私たちの目から見ると、この言葉を理解するのが簡単ではないと思います。なぜなら、イエスさまは続けて、人々にしるしを行なっておられたからです。悪霊に取りつかれた人々と病人を癒し、パン五つと魚2匹で5000人を食べさせました。それにもかかわらず、人々はイエスさまにしるしを要求します。しかし、もし私たちが当時の状況の中にいたなら、私たちは、なぜ人々がイエスさまにしるしを要求したかが分かったと思います。彼らが望んだしるし、特別なしるしが別にあったからです。

31節で、人々はイエスさまにこう言います。「わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」人々は、いきなり自分たちの先祖が荒れ野でマンナを食べたことを言います。イエスさまのしるしを望んでいた人々が、先祖のマンナに言及する理由は何でしょうか。当時の人々に伝わったミドラーシュという説教・解釈集では、「最初の救い主がマンナを下されたように...最後の救い主もマンナが下されるようになさる」と書かれていたそうです。つまり、メシアがこの世に来られたら、その証拠として、イスラエルに改めてマンナが下されるということです。このような教えは、当時の人々に広がっており、これを信じていた人々は、イエスさまに、「マンナ」というしるしを要求したのです。「マンナ」というしるしこそ、メシアかメシアではないかを区別することができるしるしだったからです。

しかし、イエスさまは、このような要求が妥当ではないことを言われます。まず、当時の人々が知っていたように、モーセが天のパンを与えたのではなく、神さまが天のパンを与えてくださったからです。そして、神さまが与えられたパンは、単に人々の腹を満腹させるためのものではありませんでした。何の食べ物がない荒れ野に降ったマンナは、荒れ野の人々にとって命とも同じでした。マンナが降らなければ、彼らは飢えて死ぬしかありませんでした。神さまは命のために、天のパンを与えられたのです。これと同じように、神さまはイエスさまをこの世にお遣わしになったことも、命のためでした。人々の腹を満腹させるために、人々の欲を満たすために、イエスさまがこの世に来られたのではありません。私たちの救いのために、私たちの永遠の命のために、イエスさまはこの世に来られました。だから、今日の福音書の人々の要求はふさわしくありません。神さまはご自分の子供たちのために朽ちる食べ物を与えられないからです。神さまの子供たちが与えられるものは、命のパンだけです。

今、私たちの時代は、食べものが豊かな時代です。食べ物が多くて、時には、健康のためにダイエットをすることもあります。しかし、まだ私たちは肉的なもの、自分を満腹させることに縛られています。高くなることを願い、支配することを願い、出世することを願います。すべてが神さまの教えではなく、自分に当てられています。これらの欲は、私たちが命のパンを食べないようにするのです。私たちは、イエスさまに従うことを妨げるのです。荒野に下った天のパンも、必要な分以上を集めると腐りました。欲は天のパンも腐らせます。イエスさまは、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」と言われました。朽ちることない命のパンのために働く皆様になりますように。命のパンであるイエスさまに従っている皆様に、永遠の命が与えられますように、主の御名によって祈ります。アーメン